

「なんか雰囲気が変わってきた」

旧知の防災研究者からメールがあった。この研究者はかねて九州にあるさる市で防災講演会を定期的におこなってきた。ただこれまではカウンターパートは担当者レベルだった。それが、いきなり某政党（防災教育に熱心な政党）の地方支部主催で、県知事以下が出席する事態となったというのだ。

なぜそうなったのか、考えうるのは先月の四国の地震と元日の能登半島地震。

ただ、不思議なのは、四国の地震は、これまで件の某県に被害をもたらしてきた日向灘地震といってもいい場所が震源（どうも豊後水道地震と呼ばれているらしい）。しかも、被害は、九州側でなく四国側にでた。

これまでの日向灘地震では、前述の某県のような反応はなかったのだ。

当然、この反応は南海トラフ地震をにらんだものだ。しかしながら、政府が被害想定を公表している「南海トラフ巨大地震」（東日本大震災がモデル）では、これまでの東海から四国沖にかけての東海、東南海、南海地震に加え、日向灘地震も含んだ想定だ。地震研究者によっては沖縄まで含むというモデルも存在するほどの巨大地震だ。



大阪管区気象台のホームページで公表している南海トラフ巨大地震のモデル

もともと、日向灘地震も含んだモデルが13年前の東日本大震災直後に公表されているのに、某県の対応は、なんで今さらという感じがしないでもない。

恐らく4月の地震で被害を受けた四国側の愛媛県知事の「今回の地震への対応を検証」をするといった発言や、能登半島地震以降の報道に流されているとしか思えない。

“真剣に、取り組みだしたということは否定すべくもないが、前回の南海トラフ地震では東海地震が起きておらず東南海も南海も比較的小さかったことなどから、いつ起きてもおかしくない、東日本大震災なみの被害も起こりうると言われ続けてきた南海トラフ地震の緊張感が伴ったものか、某県の対応はその緊張感があったとしていつまで続くのか、ちょっと心もとない気がしている。

(令和6年5月)